

第39回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校3年生の部 最優秀賞 ひとりだから

弟子屈中学校 上野 絵里奈さん



私はこの本を読
んで、最初に自分
との共通点があり
すぎておどろきま
した。過剰してい

る環境も、主人公の考え方も、そして主人公の経験も私と似ているものがありました。この物語は、中学二年生の陽子と二つ歳下のリンという二人の姉弟が、自己流の遊びをいつも生み出していました。新しく見つけた遊びは、真夜中に他人の家の屋根にのぼるだけという遊びで、だんだん陽子の同級生が加わっていき、そこから友情が生まれ、学校や中学生たちから出来る友達関係などが描かれています。

私はこの本を読み始めてからずっと「屋根にのぼるだけとは何が楽しいのだろう」と思っていました。ですが、読み進めていくと「真夜中に、人目をさげながら」というだけで少しワクワクする気持ちもわからなくないと思うようになりました。屋根からしか見えない景色があるのだろうと思う私のほっとみたくなりました。

最初にも書きましたが、私と主人公陽子との共通点は、まず親が仕事で忙しいということなんです。なので陽子はいつも弟とオリスナルの遊びを考えていました。私も四つ歳上の兄がいて、小学生の頃などは自分達なりにいろんな遊びをしていた気がします。次に陽子は弟のリンが「だれとでも仲良く」というフレンドリーな性格に対して、

「だれかとだけ仲良く」という人見知りのな性格をしているところなんです。私もいつも限られた人しか仲良く出来なくて、リンのようなだれとでもというフレンドリーな性格に憧れます。そしてリンと同じ陸上部で陽子の同級生の七瀬さんという友達とけんかをした時に、私はめったにけんかをしない方ですが、陽子の様に怒ると相手の言葉が返ってくる前に、一方的に怒ってしまった。二つ目は、陽子達の母親の親友のさおりさんが友達のことや悩んでいた陽子に言った「友達のことやなんだからさうして、学生の特権みたいなところあるもんね」という一言です。私も今でもけつこう友達のことや悩む時があるけれど、それを学生だからと考えたことはありませんでした。そう考えるとたくさん悩みたいわけではないけれど、これも今しか出来ないならばたくさん悩んでそこから学んでいろんな答えを見つけて、大人になりたいと思いた。二つ目は陽子のクラスメイトでいじめられっ子のキヨスクが担任の先生に言われた「大人も子供もだれだって、一番しんどいときは、ひとりで切りぬけるしかないんだ」という言葉です。私は「つらいとき一人がかかえこまないで」「協力しあう」などの言葉ばかり聞きなれていたので、なかなか自分自身は甘えていたように思えます。一番つらいときはひとりで切りぬける

と言われれば納得できる気がします。私もどんな壁にぶつかっても最後は自分だと思っただけです。人は一人では生きていけないけれど、はらはらに生まれ、自分の人生を生きて、自分のやりたいことをして、はらばらに死んでいきます。でもそんな私達だからこそ、手をとりあえる友達が必要なのだと思います。自分の力でやっていく中にも友達とのかかわりやそこから学ぶものなどもたくさんあります。陽子が「頭と体の使い方次第で、この世界はどんなに明るいものにもさみしいものにもなるのだ」と言っていました。たぶん、友達と上手にいかないことがあっても、自分を成長させてくれる出来事だと考えるのか、もうたまたまと考えるのでは見える世界が変わってくると思います。

書名「宇宙のみなし」

森 絵都 著

この本を読んで私は、今までにない考えを持つことが出来たし、今までの自分をふり返ることが出来ました。これからも、いっぱい悩んで私の答えを見つけ、宇宙の暗闇にのみこまれないように自分の力で輝かせていこうと思います。

■高等学校1年生の部 最優秀賞 いつかは私も

弟子屈高等学校 藤江 弥生さん



「私もこの人に憧れた」この本の登場人物、図書特殊部隊の笠原郁が言っていた。しかし、

私は笠原のまっすぐで純粋な心に憧れた。まっすぐ過ぎて、失敗もたくさんしていたがその大胆さがカッコいいと思った。今私には大胆さが足りないと思うし、もっと自分に素直になりたいと思った。また、同じく登場人物の堂上篤は笠原を含めた五十名の教育隊をまとめる鬼教官である。堂上は怒鳴ってはばかりで素っ気なかったが、その中にもいつかちょっとした優しさが隠れている様に思えた。笠原の強い想いとまっすぐな優しさ、堂上の表にはあまり出さないやさやかな優しさ、優しさには色々な形があり、どんな形でも心に届くのだと思った。

この物語の中では図書の不都合な検閲に反対する子どもたちが登場した。子どもたちの自由の本を読みたいという気持ちは私にはよくわかる。私も本が好きだし、もしそのような世界があったとしたら私も嫌だと思っただろう。しかし、私なら嫌だと思っただけでそれ以上は何もしないと思うが、この物語に登場した子どもたちは私とは違った。嫌だと思っただけでなく、行動に移したのだ。思っただけでなく、行動に移す勇気も私も見習いたいと思った。彼らの最初のやり方は良いやり方とはいえない

ないものの、笠原たちのアドバイスももらいながら大人の喧嘩で自分たちの気持ちを伝えられたということはずいぶん大事だと思った。この時に私は大人の喧嘩法というものを知った。それは自分の言いたい事だけを並べて言うのではなく、どれだけかさんの人に聞いてもらええるかを考えたうえで主張するということ、私の中にはなかった考えで今後には生かせれば良いなと思った。

また、登場人物の台詞もとてもインパクトがあり、心に残っている。その中でも一番印象に残っている言葉は「あたしはあなたを超えるんです。だから絶対諦めません」という笠原が堂上に向けて言った言葉だ。私はこの時素直に「カッコいい」と思った。目標としている人がいて、その人を必死に追いかける笠原の姿は自分の理想の姿かもしれないかと思っただけで、今まで本気で、必死になって誰かを目標にしたり、何かを追いかけてきたことがないので笠原の気持ちを完全にわかるにはまだ時間がかかるが、いつかわかる日が来ると思う。その日が来たら私にも本気で追いかけてみたいものを見つけたということだから。図書特殊部隊の訓練も厳しい中で、「絶対諦めない」という言葉はとても大きな意味があると思った。男性ばかりの図書特殊部隊の中で数少ない女性が必死になって「本を守りたい」という一心で頑張っている姿は同じ女の人として尊敬するし、男も女も関係ない、やるかやれないかは自分の目標しだいであるのだと思う。私は笠原のような人を是非応援したいと思う。

堂上の言葉で印象に残っているものは「アホが貴様!」だ。挙げ句の果てには「それともバカなんだ。バカがバカの真似するなバカ!」である。怒鳴られてはかりで笠原が可哀想に思ったが、堂上がここまでして笠原をしごいた理由はちゃんとあったことをこの本を読んでいく中でわかったとき、一番堂上の優しさを感じた。「少なくとも生半可なことで命に關わるようなハマは踏まないだけのことを叩き込んだ」その言葉はただ過去の話があっただけで笠原に対するあたりがきつくなり、また照れているわけがなく、それだけ笠原のことを想っているということだと思っただけで、何かあった時にいつも来てくれるのは堂上であり、そのよつな時はいつもよりずっと優しくした。背は笠原よりも小さいもの、一番の心の支えになっていたことは確かである。笠原の友達である紫崎麻子も笠原にとつて心の支えになる一人だと思っただけで、笠原がへこんでいたりしたとき、上手にプラス思考にさせてくれる言葉をかけた。ときには厳しい言葉をかけることもあるが誰よりも笠原のことをよく知っているからだ。私は心の支えとなる人がいるということがどれだけ自らを変化させて、進歩するのに大切なことであるかに改めて気づき、大切にしなければならなかった。その大切さに気づけて良かった。

同じく登場人物である、手塚光、小牧幹久なども独特のキャラクターであるがそれぞれキャラクターが目立って良い作品になっていると思った。例えば、熱血ハチ力な笠原だけであると話が単調過ぎにないと思っし、そこに小牧のような冷静沈着

で、決して弱みを見せないキャラクターが入ることで釣り合いがとれて読者を「また読みたい」という気持ちにさせる作者さんは凄いなと思った。

私は最初、笠原郁という人物に憧れたことから始まり、今はただ憧れているだけではなく、登場人物の心情、直接言葉で書かない気持ちの部分を読みとれるようになり、読んでいて気持ち良く、より登場人物の心に近づけたかと思う。いつかは私も本気で何かを追いかける人になりたい。簡単なこととはわかっているが、これから後悔しないように、そして自分の夢を叶えるために全力で進んでいけるようになりたい。そう強く思った。

書名「図書館戦争①」

有川 浩 著

(寸評)文体の丁寧さや、読み手が理解しやすいように整った構成の作文です。さすが高校生と言え作品です。自分が影響を受けた、考えさせられたセリフや表現を具体的に本文中から引用するなど、読書感想文として基本に忠実なところも良いです。登場人物に憧れ、自分も「こうなりたい」という思いや、これから夢を叶えるためにしっかりと意思表示をするなど、読み手に対しての主張もはっきりしている、読み応えのある感想文でした。

※生徒の学年は、コンクールが行われた平成25年度当時のものです。